

音楽と私

つくばSE、牛久SE、我孫子SE 谷岡憲隆

(1) 新しい音楽との出会い

中学生の頃、ラジオのダイヤルを回していたら偶然Far East Network（当時の駐留軍極東放送網）から流れる不思議な魅力を感じる音楽を聴いて胸が熱くなった思い出がある。それは今まで聞いた音楽とは全く別のものでリズムが活発で音色も刺激に充ち満ちていた。特に印象深いのはベニーグッドマン楽団や、グレンミラー楽団の演奏はクラリネットの音が実に美しい音色で輝いていたことである。その後スウィングジャズから摩登ジャズも聴くようになり、大学に入ると軽音楽部に入り先輩からクラリネットを習ったのが事の始まりである。



(2) 音色の魅力

楽器を手にするようになって、クラリネットは実にいろいろな音色が出る不思議な楽器だと感じるようになった。中低音のシャルモー領域の柔らかい響きと、高域の明るい音色はまるで別の楽器のようである。先述のグレンミラー楽団のムーンライトセレナーデは透明感のある美しい音色が抜け出ており、一方当時流行したアッカービルクの白い渚のブルースは堅いリードで低音を響かせる独特の音色であり楽器の表現力はとても幅広いと感じた。その後、クラシック音楽も聴くようになり、カールライスターの演奏するモーツアルトのクラリネット五重奏には驚いた。天上から舞いおりてくる天使のように典雅でこの世とは思えない美しい音色であった。私にはこれがクラリネットの音色の究極点に思えた。その頃からクラリネットという楽器は草笛の延長と考えるようになり、振動の源であるリード磨きにも夢中になり音色を工夫するために試行錯誤し、結果としてたくさんの駄目リードを作った。思い起せば、中高校の頃からラジオやステレオを自作したりするのが好きであり、どうも音楽が上手になるための努力よりも音色いじりの方が優先されていたように思える。

その後、社会人になっても細々と音楽活動を続けたが、忙中閑ありの合間を縫っての活動で下手は下手なりの領域を超えられない状態で現在に至っている。そのような中で「つくばシニアアンサンブル」発足のニュースを知り、早速入団して岡村代表と出会った。そして多くの良き指導者にも出会えた。私は、とにかく楽器をいじって音を出していれば満足なので、新しい機会を頂いた岡村さまに感謝している。

(3) 音階と音律の不思議

経緯とは別に、定年を迎えた頃から、どう頑張っても実技では理想と現実のギャップは埋まらないことを自覚し、少しずつ知的好奇心の方向に感心が移っていった。若い頃から抱いていた素朴な疑問であるが、そもそも音楽の「ドレミ」の音階と音律は誰がどうやって創ったのかについて歴史を遡って勉強をするようになった。考えれば考えるほど不思議で夜も寝られなくなったこともあり我ながらバカな奴と思った。調査が進むに従って「ドレミ」の音律は直線的な比例関係ではなく、対数（例：平均律）や等比数列（例：ピタゴラス律）に近い理論であることも分かってきた。（注）音律については宗教学者や数学者等により2500年にもわたって改良が繰り返されており実に奥深い物語になっている。私は電波工学を専門としていたことから、電波や音波も光も基本的性質は同じと捉えて今は音律論にハマっている。気がついたら趣味と仕事が繋がっていた。改めて自分は音楽が根っから好きであることに気がついた。

「楽しきかな、音楽と波の世界の我が人生」 （注）ひびき Vol.66参照